

再帰態・中間態・許容再帰中間態の機能

— 再び sich V lassen 構文など —

田 原 薫

0. はじめに

かつて『ニダバ』第25号に「SOOTHと「挟み統率」から開ける展望」という論文を出してもらい、それに副題として「ドイツ語 sich V lassen 構文を中心に—」という解説をつけ、統語分析の実例を提示したことがある。当時SOOTHと呼んだのは現在のSOOTH 2の前身であり、目的語指定辞起源説 (Specifier-Original-Object Theory) の英語名の各語の頭文字を取って繋ぎ合わせた略称であった。それによって少なくとも他動詞とその2つの項との節文構築過程における位置関係、すなわち《主語候補は他動詞にc統御され、目的語候補は他動詞にm統御されつつ主語候補をもc統御するVP中の指定辞である》とする句構造が英語などの分析に大いに役立つ、ということを主張した。

しかし、それでは他動詞構文という狭い枠の内部での議論であり、主語というものは他の、たとえば自動詞構文、形容詞述語構文、前置詞句述語構文、名詞句述語構文などにもどのみち出現するのであるから、もっと一般的な主語候補の位置づけをする必要に迫られて、1年後刊行の『ニダバ』第26号「ゼロ述語から出発する句構造文法 — 補語名詞句否定説：名詞句すべて指定辞説」で、無標的な主語候補は真っ先に現れる (原始的な叙述力の乗り物たる) ゼロ述語の指定辞である、という立場を提案した。もちろん他動詞の目的語は他動詞の指定辞のままであるから、SOOTHという略称はそのまま使えるのであるが、それでは旧説との区別がつきにくいので、新システムの方を「主語初頭生起説」、英語では Subject-Occurs-Originally Theory と呼ぶことにした (けれど、SOOTHという頭文字は同じになるので、新しい方をSOOTH 2と略称することにした)。

集合論的な1次元の句構造という図式は、すべての言語に対して有効とは思えないものの、たまたま英語には Role and Reference Grammar でいう核結合 (nuclear juncture)、つまり位相論的統語観=Topologically Viewed Syntax での面接着型節文結合がないので、英語学に関する限り句構造の限界があまり認識されず、今だに英語学会などではチョムスキーの残党が命脈を保っているらしいが、同じ標準平均欧州語の中でも英語を少し離れてドイツ語やフランス語に踏み込んでみると、句構造説ではもう深い分析に役立たない、という事態が起こる。本論考はそのような(再帰)中間態の分析に踏み込んでみたい。

1. 問題として取り上げる各種の構文

本論考では次のような構文を取り上げるが、言語は英・独・仏にわたっている。

- (1) Mishima killed himself. 「三島が自殺した」
- (2) Mishima hat sich gemordet. 「〃」
- (3) Sie lässt sich tragen. [1997年の正書法改訂で *läßt*→*lässt* となる]
- (4) She has herself carried. / She is having herself carried.
- (5) She is allowing herself to be carried. 「運ばれるままになっている」
- (6) She/It can be carried. 「彼女／それは運べる」[it はドイツ語で女性名詞になるもの]
- (7) Das Buch lässt sich nicht lesen. 「読めない」(印刷不鮮明、理解不能、面白くない、入手困難など)
- (8) Das Buch verkauft{/*kauft} sich gut. 「よく売れる／*よく買える」
- (9) This book sells well {/*buys well}.
- (10) Cette année le noir se porte. 「今年は黒(い服)が流行(はや)っている」
- (11) Cet ouvrage se laisse lire. (縮) 「この作品は読ませる」
- (12) Auf diesem Papier{/Mit dieser Feder} schreibt es sich gut. 「この紙(／ペン)は書き易い」

(1)(2)はもちろん事件記述であって、業績動詞(accomplishment verb) の、無標的には受動者(従って能動者とは他者)である筈の目的語項がたまたま主語と同一指示だというだけの構文であり、特に中間態とか、或いは古典印欧語(サンスクリット／ギリシャ語)文法論でいう「中動態」というvoice などとして扱う必要のないものである。上記の古典印欧語が中動態というvoice をもっていて、問題の場合それを使うとか使わないとかいう話とは無関係に、近代の英・独語の構文は完全に他動詞能動構文であり、Binding theory を持ち出すまでもなく、目的語を *him/ihn* に取り替えるだけで、構文の変化なく自殺を他殺の意味に変えることができる。だからこれを「再帰態」というジャンルに分けてもあまり意味がないが、わずかに **Himself was killed by M.* などと受動態に転換できない点だけで、自動詞構文との中間的存在であるにすぎない。

「中動態」或いは中間態というジャンルを論じる必要の芽がきざし始めるのは、ドイツ語 *Ich wasche mir die Hände.* フランス語 *Je me lave les mains.* 「私は手を洗う」のような文の解析においてであって、英語では *I wash my hands.* というから、洗う対象が自分の手であることは目的語NPの *my hands* の中に凝縮包含され、その情報を外に取り出すことができないし、*my hands* を *his hands* に取り替えれば他者の手を「洗ってあげる」という意味に変わるが、構文は依然として他動詞能動構文であり、特に「再帰態」というようなvoice を立てる必要がない。一方フランス語の伝統文法では *se laver* という語彙が「代名動詞」というジャンルのもとに *laver*(洗う)とは違う語彙項目であるかのように扱われている。だから上記の *Je me lave les mains.* は *Je te lave les mains.* 「私はお前の手を洗ってあげる」とは別のジャンルの動詞を含むように扱われる。恐らく

その根拠は、上記の例文のペアが完了型構文に転換される場合に各々別の扱いを受ける、すなわち異なった助動詞を取ることであろう。後者が *Je t' ai lavé les mains*. 「お前の手を洗ってあげた」に対して前者は *Je me suis lavé les mains*. 「私は自分の手を洗った」の対で見られるように、他動詞では HABERE(持つ)動詞を使い、代名動詞では ESSE(ある)動詞を使うのである。ESSE動詞は受動態の助動詞としても使われるから、フランス語は完了相に関する限り、幾分「中動態」のカラーに色づき始めていると言えよう。

他方、ドイツ語の場合は再帰動詞というジャンルが立てられるが、上記例文の *mir* のような所有者与格の扱いは微妙で、学者の意見は一致していない。ドイツ語文法では再帰代名詞が与格であれ対格であれ、必ず再帰代名詞を伴うとか、単独の動詞と明確に意味が異なるような場合のみ、遠慮や躊躇なく再帰動詞とされているようである。

しかしこれが古典印欧語の場合になると、真の中動態が出現し、それはしばしば受動態と同形を示す。【印欧祖語では中動態の方が本来の態で、それから受動態が派生したと一般に考えられている。】ギリシャ語の中動態の活用を例示すると「自分の…を洗う」では *louómai, louēi, louétai; louēsthon, louēsthon; louómetha, louēsthe, louontai*. というのが直説法現在のそれぞれ単数 1 人称, 2 人称, 3 人称; 両数 2 人称, 3 人称; 複数 1 人称, 2 人称, 3 人称の形である。【ギリシャ語は法、時制、態による動詞の変化が多く、記憶するのに苦労するが、こんな複雑な言語を語っていた人々がいたことは感動に値する。】従って *I wash my hands*. は *louómai tō khēire*. となり、対して *louō tō khēire*. と言えば能動態で、所有代名詞や属格名詞が付いていけば当然だが、付いていなくても他人の(両)手を「私」が洗ってやることになる。なお、現在時制では受動態は中動態と同形なので、対格目的語 *tō khēire* 'the(=both) hands' がなく *louómai* だけならば、「私は自分の身体を洗う」とも「私は洗われる／他人に洗ってもらう」という意味にもなる。洗う行為をする動作主が誰かを問わず、洗う行為の結果が主体に及んでくることだけを焦点化する、祖語時代の「求心相」(centripetality)のなごりとも、「能格(絶対格)性」のなごりとも言われている。因みに能動態は「遠心相」(centrifugality)に相当する。以上のような中動態の知識は近代語の中間態の分析にも参考になるであろう。

さて道草が長くなったが、例文(3)は英訳で(4), (5), (6)になるように3通りの意味がある。実は例文(3)は坂本(当時は旧姓横山)真樹氏が1995年関西言語学会第20回大会で発表された際にハンドアウトで提示されたものであり、これらの選択的な意味のうち(6)の意味になる場合が *lassen*-中間構文という名のもとに論考のメインテーマとされている。坂本氏はドイツ語学にも言語学にも真摯に取り組んでおられる篤学博搜の才媛であり、私の敬服する人の一人であるが、その時の「文法構文の言語形式は意味に基づいて動機づけられている」という認知論的言語観に立ち、文法形式において一致している両構文の意味的関連性を探ると掲げられた発表の目標には、正直言って疑問を禁じ得なかった。「文法形式において一致している」かどうかはそもそも大問題だったからである。

2. ドイツ語学でいう文法構文／文法形式とは一体何か

1995年は Chomskyの *The Minimalist Program* が出版された年でもあり、Langacker の論文 'Raising and Transparency' が *Language* に載った年でもある。もちろん日本では阪神淡路大震災が起こった年でもあり、それから10年続く不況の真っ只中で国民が呻吟していた年でもあったが、破壊されたのは日本の大都市圏や経済だけではなかった。上記の理論家たちが主唱する変形生成文法や認知文法が 'peak out' というか、峠を越して奈落の底へ転落し始めた turning pointの年だったのである。当時チョムスキー派の頹勢は広く認識されていたし、それは上記大著を以てしても挽回するに至らなかったが、ラネカーの方は日本国内で広く人気を集めていて、どの学会でもmetaphorとか、metonymyによる意味拡張だとか、trajector とかlandmarkなどといった話／発表で持ち切りだったものである。中にはずいぶん愚かしい発表もあった。It is raining.での 'it' のmetonymy的意味論とか、There is a chair. の中の 'there' の意味論などといった発表が、田舎の大学生ならともかく、京都大学大学院博士課程の院生によってなされたりしたが、そんなのを聞いて私は唖然とするよりも、一種の悪寒を覚えたほどである。だが、明らかに理性の不足を露呈した 'Raising and Transparency' の発表がいわば Langackerの命（学者生命）取りとなって、認知文法は急速に人の口に上らなくなった。そういうわけで、認知文法の立場に立って、「文法構文」の prototypicalな意味からmetonymy的に別の意味が派生して意味領域が拡張していく、という坂本（横山）真樹さんの主張も1996年にはやや流行遅れとなり、翌1997年にはやや古くさい方法論のような感じがしてきた。これは横山さんが悪いのではなく、博士課程の指導教官として頑固なラネカー派である西村義樹氏の指導を受けていたから、やむなくラネカー派の方法論に頼らざるを得ないという事情があった。

しかし仮そめにも1995年の時点で「文法構文」とか「文法形式」とかの概念を持ち出すのなら、決してチョムスキーが良いとは言わないが【1984年には Foley & Van Valin提唱のRRGも世に出ていた】構文論／統語論や「形式文法」で問題の sich V lassen 形式がどう扱われているかを調べた上で、「文法形式の上で一致している」とか、違う、とか言ってほしかった。単に語の連鎖を順々に追っていった「主語-lassenの定形-sich-他動詞不定詞」という「連鎖」だけがドイツ語の辞典などでは「構文」として扱われているが、それがドイツ語学の水準ならば、それは明らかに国際的な言語学の水準から遅れている。フランス人やオランダ人の学者が嬉々として変形文法を追っかけていたのに対し、ドイツ人やロシア人があまり追随しなかったのは立派なことであるが、立派なことが後進性や鈍感さに繋がってはあまり喜べないのである。国際的な水準の構文論ならば、れいの構文において、少なくともその中の sich は lassen の目的語なのか、それともVの目的語なのか、という問題が生起するであろう。もし（意味論的に考えて） sich は lassen の目的語でもあり、同時にたとえば tragen の目的語でもあるとすると、樹形図式で一つの成分に集まる「連理の枝」が生じて、どちらから対格をもらうのか、といった問題が生じる。

例文(3)が英訳(6)の意味になる場合は、そこに現れる lassen は伝統的なドイツ語文法で「話法の助動詞」というジャンルに入れられるのが一般的であるようだ。(6)の意味をドイツ語で言い換えると Sie kann getragen werden. となって、同じく「話法の助動詞」に属する können が使われるからそう扱うのであろうが、実は lassen は他の話法の助動詞とはまったく異なった統語的性質を示す。つまり他の話法の助動詞 können, dürfen, mögen, müssen, sollen, wollen では、それらの定形とペアを組む主語は同時にそれらと結合する本動詞の意味上の主語になっている。しかし(3) Sie lässt sich tragen. では主語の sie は本動詞 tragen の意味上の主語(動作主)たる《誰か他人》とはまったく別人/物であり、同時に tragen の目的語たる sich と同一指示(coreference)になっている。たとえ助動詞として文法用具化(grammatic(al)ize)されていても、もとは許容/使役の本動詞であり、元来複文を作る動詞だったのであるから、lassen は単節文でなく、従属節を伴う主節の中核をなす(助)動詞として分析されなければならない。

3. SOOTH 2による lassen-中間構文の分析

かつて『ニダバ』34号所載の拙論「「カリスマつまみ食い」論文作法の戒め」p.183でフランス語の使役構文 Je fais lire ce livre à Jean. のSOOTH 2による(句構造)分析を提示したことがあったが、その構造は許容構文 Je laisse lire ce livre à Jean. にもそのまま通用する。だからその分析はドイツ語の許容(／使役)構文 Ich lasse dieses Buch von Hans lesen. に対しても、その従属節が位相論的統語観という面接着型で主節に畳み込まれて(telescoped)いる限り、通用する筈である。そこで問題の Sie lässt sich tragen. が中間構文の場合や、Das Buch lässt sich leicht lesen. のような(複)文における主・副両節の結合様式が真に面接着型であるかどうか確認しておかねばならない。フランス語の laisserもそうだが、ドイツ語 lassen も稜接着型(英語型)の構文 Ich lasse Hans das Buch lesen. を作ることがあるからである。後者の場合、主節の目的語 Hans と従属節の目的語(大受動者) das Buch という2つの対格項が出現し得るのを特徴とするが、今問題の lassen-中間構文には対格項として唯一 sich しか現れない。だからこの種の中間構文は面接着型の構造枠で分析されねばならない、とわかる。

またこの構文は全体的な叙述機能からみて「属性記述」であることが明らかであるが、従属節の機能は「事件記述」であることがわかる。先ほど sich は das Buch と同一指示だと言ったが、実は《本》の違った側面を指示している。《本》に内在する徳性が、物理的実体としての本を、人が難易感や面白さの感覚をもって読むことをコントロールし、許しているのであるから、そういうことを明示するような構造でなければならない。そのような分析は位相論的統語観の立体構造で行なうのが望ましいが、まずSOOTH 2によって簡略に分析してみよう。読者諸賢は、できれば旧SOOTHによる分析(『ニダバ』第25号所載)と新SOOTHの話(同26号所載)を座右にして読まれたい。

次の図1は Das Buch lässt sich leicht lesen. の部分図、図2は全体図である。

図1 【∅evは事件記述のゼロ述語。∅atは属性記述のゼロ述語】

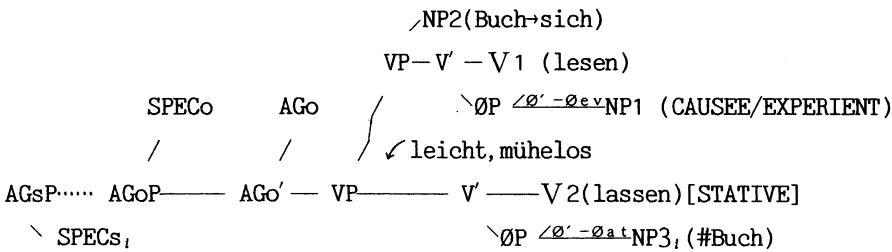
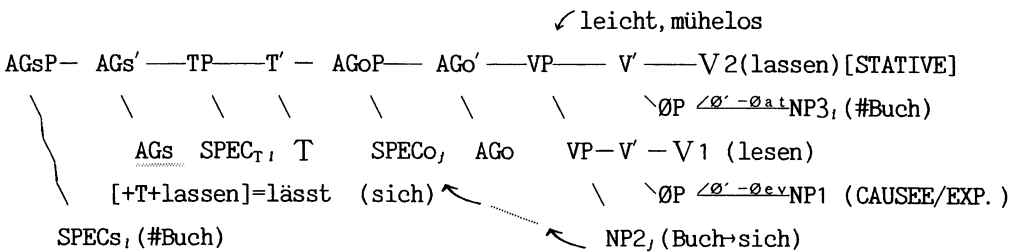


図2 【∅evは事件記述のゼロ述語。∅atは属性記述のゼロ述語】



ともに右から左へと構築が進むように書いた図1と図2は一見異なって見えるが、図1は『ニダバ』34号所載の拙論(p.183)で 'Je fais lire ce livre à Jean.' の句構造として示した図(7)にはほぼ準じたもの。図2は提示と印刷の便宜上、図1のAGoPまでの上下の枝を逆転させた表現であるが、階層関係はどちらも同じことである。最上位のVPは主節のV2(lassen)の投射であり、その直下のVPはV1(lesen)の投射として主節に畳み込まれて【埋め込まれて(embedded)いるのではない】いるものである。AGoは受動者資格(をモニターする)述語、AGsは主語の資格(をモニターする)述語であり、それら自体は無音ながら、対格や主格の格認可に関する要素である。図で#なしのBuchは物理的実体としての《本》を表わすが、#付きのBuchはその《本》に内在する徳性(virtue)の側面を表わす。結局この徳性が主語(SPECS)に進出することになるわけであるが、それは本来原始的な∅述語に【属性記述】という素性が乗り込んだ∅atの指定辞として生起している。

まず図1のV1(lesen)の投射から見ていく。これは「人が物理的実体としての本を読む」という事件を表わすから、始発の∅述語は素性【事件記述】が乗り込んだ∅evであり、その指定辞NP1は不特定な《人》である。この地位を占めるのは事件記述の主語候補であるから、「読む」以上《犬》や《本自身》でないことは確かであるが、今は《本の徳性》を取り立てて属性記述をしようと話し手が意図しているのであるから、事件記述の∅evの指定辞たる不特定な《人》は日陰の脇役になってしまい、表現の必要が感じられなくなっている。たとえ《特定な人》であっても、動作主の側面よりも「難易感の経験者」という側

面の方が強く感じられる局面であるし、SOOTH 2 統語論では始発位置のNP1 に格付与（格認可）する手段もないから、もし情報化する必要が生じたら für Hans などの斜格表現に頼らなければならない。また物理的実体 Buch がV1 の指定辞なのは当然である。

さて、このV1(lesen)の最大投射であるVPが、V2(lassen)[STATIVE]【属性記述だから動的でなく静的であるのは当然である】の指定辞として畳み込まれているわけであるが、そんな構造から次のことが言える。すなわち「事件記述としてのlesen-句の指定辞 Buch は(lesen に統率されているのは当然として)、間接的に lassen にも統率されている」ということである。SOOTH 2での統率の概念には2種類あって、1つは「引率」、もう1つは「配率(はいり)」であるが、たとえばNP3 は lassen に引率されているし、lesen-句は lassen に配率され、その中の指定辞NP2 も lassen に間接的に配率されている、とSOOTH は見るのである。従って間接的に lassen に引率されている#Buch (内在徳性)と、NP2(Buch)(物理的実体)とは同じ lassen の共通の統率領域に包含されることになる。この実感こそが NP2(Buch)を sich に置き換えることを可能にしたのだ！もし物理的実体の項が内在徳性の項と別の動詞の統率下、つまり別のTPの中にあつたとすると、たとえ coreference であっても再帰代名詞に置き換えることはできないであろう。変形文法流の束縛理論を持ち出すまでもなく、それは常識である。しかし変形文法では sich がVP内の「補語」で、逆に主語候補が指定辞とされているから、sich が特定/不特定の(人)を表わす指定辞と同一指示になる筈であり、とても lassen-(再帰)中間構文は成立(説明)し得ないであろう。英語が lassen-中間構文を発達させなかったのは、図1のような句構造を許さなかったせいであるが、位相論的統語観によれば結局、面接着型の節文結合をもたないという英語の特殊性が障害になっている、と言える。

ところで2. 節で、#Buch / Buch と同一指示の sich が lesen と lassen のどちらの目的語か曖昧であり、問題になる、という趣旨の話をしたが、どちらの動詞の目的語とも感じられるというのが正直な話であろう。その直感を裏づけるのは、「NP2= sich は直接には lesenの指定辞(目的語)であるが、そこには lassen の統率力も及んでいる」という事実であり、広義には lassen の目的語という「匂い」が漂うのも頷けるわけである。私は、中間構文で sich に対格を保証する動詞としては lesen の力の方が大きいと見る。それは lesen の方が sich に対する統率子としてより直接的だからである。しかし直上位に掛かるAGo は「lassenと組んで挟み統率によってその目的語に対格を認可する」という役職をもち、その地位にもある述語であるから、V1 が自動詞である Ich lasse dich ruhig schlafen. のような構文でNP2 に格認可するのが本来の任務である。それを lesen と組ませてその目的語の格認可に使う、というのは不正流用の感じもする。しかし次のように考えてはどうだろうか：NP2=sich は lesen の配率と AGoの間接的引率を受けてまず形式的に対格を認可されるが、sich は lassen の「大受動者」でもある。その関係を確認するために、sich は SPEC_o の位置に転入して AGoの直接的配率をも受ける。…と。

さて、こうしてNP2 に対格が認可され、lassen との関係も確認されると、sich は図上のその位置に固定されるから、物理的実体である Buch(=sich)は文主語の地位に進出することができない。そこで当然ながら内在徳性の側面である#Buch が昇進して行くのであるが、AGo の配率領域のSPEC_{Co} は sich に占拠されたからここを飛ばし、まず図2のSPEC_Tへ上昇移転する。そこで時制子TとAGs との挟み統率を受けてこの#Buch は主格を認可される。さらに何らかの主題化(話題化/焦点化)の作用を受けて真の節文主語SPECs の地位に就任するわけである。leicht/ mühelos といった難易感を表わす副詞は上位のVPに修飾語として付加される。以上の過程をへてlassen-中間構文 Das Buch lässt sich leicht lesen. が構築され、また(7)も、そして 例文(6)の意味になる場合の(3)Sie lässt sich tragen. も生成されるわけである。

4. 非-lassen-型再帰中間構文はどう構築されるか

いま物理的実体である sich(=Buch)がAGo の配率領域であるSPEC_{Co} に転入するという話をした。これは lassen-中間構文に起こる過程であったが、語彙項目としての lassen が現れない節文で、意味的には lassen-中間構文と同じか、或いは近い意味になる構文がある。ドイツ語では(8)であり、これは Das Buch lässt sich gut verkaufen. に近い意味を表わすが、微妙なニュアンスは non-native である私にはよくわからない。しかし恐らく(8)の方が(属性記述を内包しつつも)より現実的な事件記述に近いであろう。通言語的に「よく買える」がおかしいのは、人が本を買うのは本の内容もさることながら、何よりも《本を買おう》と思う人の意志が事の成否を左右するから、本の内在徳性が主語になりにくいのである。(8)の場合、事件記述といってもやはり本の内在徳性が本の売れ行きを左右していることに変わりないから、SOOT_h 2はそれを反映しなければならない。まず lassen といった有音の動詞は「隠れキリシタン」ならぬ「隠れ許容動詞'crypto-permissive verb'」といった無音の動詞に変わらねばならない。従って(8)はそんな動詞を主辞とする crypto-lassen 中間構文である。

動詞以外の成分は図1・2と同様である。Buch はやはり sich となってSPEC_{Co} に転入する。ただ今回は Buch と#Buch とがあまりシャープに分離していないが、それでもやはり物理的実体と内在徳性の区別はある。だから主語になるのはやはり#Buch であるが、動詞が隠れ-lassen では時制も法も担えないので、それに代わって有形の動詞 verkaufen がAGsの位置に転入し、AGs 及びTと合体して定形 verkauft になるのである。しかしこの動詞は元来事件記述のevの枝に発生したものであるから、内在徳性に触れつつも、その内在徳性によって現実に《本がよく売れる》という事実をも主張している筈である。句構造上の地位について言えば、SPEC_{Co} に転入した sich は、(2)の「自殺」の場合のように決してNP2 としてVに直接統率されているわけではない。それはよりTに近い位置(Tの直下)を占めることによって、1. で言及した印欧祖語あるいはそれ以前の祖語の時代の

5. まとめと補遺

英語の(9)とドイツ語の(12)が残ってしまったが、英語のこの形の間接構文は理屈づけが難しい。図1～3のような樹形図は、英語に面接着型の節文結合がなく、従属節は必ずTP(以上)の資格で主節に埋め込まれるという特徴から、英語にはなじまない。(9)のような文は、他動詞と自動詞の区別が殆ど消滅しかかった(いわば文法的に中国語化しつつある)英語という言語の特異性で、『ニダバ』28号所載の拙論を参照されたい。

形式主語 es を立てた非人称再帰態を使うドイツ語の例文(12)のような構文も難問の一つである。語感としては Auf diesem Papier/Mit dieser Feder が副詞句ながら意味上の主語になっているようだ。それを内容空虚な代名詞 es が受けて、いわば副詞句に名詞性を与えていると言える。動詞句 sich schreiben は意味的には das Schreiben gelingt. 「書くことがうまくいく」と言うに等しい。まあしかし図2・3や位相論的統語観を応用し、隠れ-lassen をうまく使えば解ける見通しは充分ある。今後の課題としておこう。

さて、『ニダバ』34号の拙論でその中の図(7)が面接着型の図(6)右図を枠組とする位相論に基づき、それを句構造で写像したものであることを述べた。また『ニダバ』37号では拙論「生成文法生誕50周年を過ぎて」で、やはり面接着型の図1と図2を使って 'Sie lässt sich tragen.' (彼女/それは運べる)の位相論的生成過程を説明した。本来なら本論考でもそのような分析(図)を再提示したいところであるが、何ぶんスペースの不足から諦めざるを得ない。それらの既刊号を座右において参照されたい。

位相論的統語観、とりわけ(英語にない)面接着型の節文結合【'clause union'と呼ぶ人もある。】の面白い点は、ドイツ語と日本語のような、表面的にはまったく異質に見える言語に案外な共通性が見つかることである。『ニダバ』34号の拙論で出た「論文は先生によって加藤さんに書かせられた」でも、先程の 'Sie lässt sich tragen.'でも、能動者【後者では内在徳性#sie】と受動者【加藤さんと隠れ-man】と大受動者【論文とsie-sich】が構文意味論的には出揃っている。しかし情報的にあまり重要でない項は義務的に隠されたり、任意に省略されたりする。この辺が類型論的言語学の面白味である。

なお英語の例文(4),(5),(6)にはすべて過去分詞 carried が使われているが、それは英語が稜接着型の節文結合しかもたず、主語をもつ受動clauseか、それから枝葉を切り取ったsmall clauseを埋め込むしかないからである。英語の特異性を再認識されたい。

さて、言語学の「温新 知故」の意義を私は主張したが、近代語であるドイツ語中間構文における sich の句構造上の位置をTの直下の SPEC_oと見なしたことは、ギリシャ語などの中動態の理解にも役立つ。つまり古代語では代名詞的な求心相の指示子がSPEC_oに入っていて、これもTとAGsと合流して動詞の定形化に参加したと考えればよいのである。

参考文献

☆田原 薫 で『ニダバ』21、25、26、27、28、31、33、34、37の各号に掲載された論文または研究ノート。多いので各個の表題と掲載年次は省略。